

あなたの街で 家庭に出向く 子育て支援を

平成24年度埼玉県共助社会づくり支援事業
(市町村・NPO等協働モデル推進事業)

孤立した子育て家庭のニーズを支える ホームスタート地域ネットワーク事業

埼玉ホームスタート推進協議会

- I ホームスタートとは
- II 埼玉ホームスタートの活動
- III ホームスタートによる地域ネットワークの構築
- IV 事例検討「ホームスタートはなぜ
問題解決のきっかけになるのか」
- V 990人の回答「地域での子育てと
支援に関するアンケート」から見たこと
- VI 協力者のことば

P2

P3

P4～7

P8～12

P13～23

P24～27

I ホームスタートとは

1 ホームスタートとは

ホームスタートは、未就学児（6歳以下）のお子さんがいる家庭にボランティアが訪問する、家庭訪問型子育て支援です。

全8日間15講座からなる40時間のホームビジター養成講座を修了したボランティアが、訪問を希望す

る家庭に、週1回2時間程度、無償で訪問をします。

滞在中は友人のように寄り添いながら、「傾聴（話を聞く）」や「協働（一緒に何かをする）」などの活動を行い、親が心の安定や自信を取り戻し、地域へ踏み出していききっかけづくりを支援します。

2 日本での広がり

ホームスタートは、1973年にマーガレット・ハリソン氏によりイギリスで始まった活動で、現在ではヨーロッパを始めカナダ、スリランカ、アフリカ、オーストラリアや日本など、世界22カ国からなるホームスタート・ワールドワイドが組織され活動を展開しています。

日本では2006年からホームスタート・ジャパンの活動が始まり、イギリスなどを訪問しての調査研究や試行が始まりました。2009年にホームスター

ト・ジャパンがNPO法人となり、現在では、東北、関東、中部、関西、四国、九州など43カ所（2013年1月現在）で活動が行われています。

主な活動団体は、子育て支援拠点やファミリーサポートセンター、保育園や児童養護施設などを運営するNPO法人や社会福祉法人、社会福祉協議会などです。また、ホームスタートの活動を始めるために有志が集まり、新たに団体を設立した地域もあります。

3 ホームスタートを始めるためには

ホームスタートの活動の中心になるのが、オーガナイザーです。

オーガナイザーは、ホームビジター（ボランティア）の養成からフォローアップ、利用者のアセスメント（ニーズの事前評価）、マッチング（利用者ボランティアのコーディネート）、モニタリング（活動の中間評価）、エバリエーション（最終評価）などを行います。また、この活動の安全性と質を担保するため、地域連携を図ることなども求められます。

オーガナイザーになるためには、実施を希望する団体からの推薦を受け、ホームスタートジャパンが実施する養成研修（2泊3日）を修了する必要があります。オーガナイザー養成講座は、概ね1月、6月、9月の年3回程度開催されますが、開催地域などは年度ごとに異なります。

オーガナイザーが誕生した団体は、プレスキーム（訪問活動をまだ実施していない準備段階にある地

域団体）として、まずホームビジター養成講座を実施していただき、ボランティアを育成した後に実際の家庭訪問活動が始まります。

子育て支援センターや地域子育て支援拠点等を運営している子育て支援者にとって、施設に出かけて来られない地域の親子に対し、今まで気にかかりながらも、なかなか対応ができないでいるという現状がありました。転居や第2子の誕生、多子家庭や健康上の理由、地域の環境などなど、家庭の外に出られない親子は少なくありません。ホームスタートは、支援者が、外に出られない事情のある子育て当事者と繋がろうとする、一つのツールだと感じています。

皆さんの地域でも、多様な子育て支援のメニューの中にホームスタートを加えて下さい。

埼玉ホームスタート推進協議会では、県内で活動する仲間を、全面的にサポートいたします。

（ホームスタート・ジャパン 雲雀信子）

Ⅱ 埼玉ホームスタートの活動

1 埼玉県の特徴～出入りの多いまち、支援につながない家庭

埼玉県は全国で2番目に社会増加数（転入者－転出者）が多いという特徴を持っています。商業地や住宅が造成され子育て家庭が流入し、待機児童など子ども関連の施設を設置してもニーズになかなか追いつかないエリアが各所にある一方で、昔ながらのエリアでは少子高齢化が進んでいる、という多様な場所を抱えた土地柄です。県下では、子育て支援拠点の整備が進み平成24年3月末には441カ所の子育て支援拠点が設置されています。

県が子育て支援後期行動計画を策定するにあたり

平成21年に行った子育て家庭の調査では、0歳から3歳未満の乳幼児の約3割強がこの支援拠点を利用し、約2割が保育園等を利用しているという結果が見られました。では、残りの約4割の子育て家庭はだれに支えられているのでしょうか。家族や知人から助けを得られているのでしょうか。様々な施策は充実してきていますが、まだまだ児童虐待などの課題が減っていきません。なかには孤立の中で助けがほしいと思っている家庭もあるのではないのでしょうか。

2 埼玉ホームスタート推進協議会の設置目的

埼玉ホームスタート推進協議会は、平成23年度、県内3地域（加須市、越谷市、和光市）でホームスタートに取り組む団体を中心に設立しました。各団体は子育て支援拠点も運営しています。訪問支援に取り組み始めた理由に共通していたのは、拠点の支援は効果的だが、そこに出てこられない家庭が支援を使わずに行き詰ったり、深刻な問題を抱えたりする傾向が強い、家庭のそれぞれのニーズに応じて使える支援が必要なのではないかという課題意識でした。

この意識のもとに行政、大学、生協、社協、多胎

育児や里親支援などの異種団体が集まり、地元での訪問支援実践、情報交換、質の維持向上、事業安定継続のための行政との協働のあり方の検討を目的とした活動を開始しました。

また引きこもりがちな親子の抱えやすい孤立の問題と、民間による訪問支援の意義や可能性について課題提案を続け、ホームスタートの県内普及を行ってきました。

3 1年目2年目の成果とこれから

普及学習会は、主催、要請あわせて平成23年度には5回、24年度には9回実施しました。子育て支援者、行政、専門職を対象に提案を行うことで周知も図られ、2年目からは吉川市社会福祉協議会、戸田市のNPO法人戸田ほっと社会館が新規に活動を開始しました。複数の地域では事業の安定継続に向けた制度化の動きも見られ始めています。協力してくださる行政や調査機関なども増え、今年度は子育て当事者の実際のニーズを把握する独自調査も行いました。

この協議会では地域、官と民、営利と非営利、活動者と研究者など様々な境界線を越えて協働してきました。異なる立場のものが、出てこられない子育て家庭にも地域の支え合いの手が差し伸べられる社会を目指すという同じミッションを以てこれからの時代に必要な住民参画型の新しい公共を追求するために、これからも活動を継続していきたいと考えています。

（埼玉ホームスタート推進協議会会長 森田圭子）

Ⅲ ホームスタートによる 地域ネットワークの構築

埼玉ホームスタート推進協議会は、平成24年度は4つのスキーム（訪問事業を行う団体）が実際の訪問事業の活動母体でした。どの団体もそれぞれその地域での子育て支援等の活動が長く、地域からの信頼が厚い団体です。

ホームスタートを推進するうえで、地域のネットワークは欠かせません。団体や地域の特性を活かし、ネットワークの構築に工夫を凝らしています。

ホームビジターの募集と養成講座

ホームスタート・よしかわ 岡田亜津美

ホームビジター養成講座を開催するにあたって、今まで社協が培ってきた信頼関係をもとに、たくさんの団体さんにご協力をいただきました。

11月開催だったので、市子育て支援課が市報に児童虐待特集ページを組んでいたのものでそこと関連して募集記事を掲載していただきました。また、ボランティアをしたいという方は、私どもボランティアセンターの『ぼらんていあだより』を目にする方が多く、その一面にも掲載しました。子育て支援センター主催の『保育ボランティア』講座の講師を職員が担当したこともあり、こちらでも広報させていただきました。愛育会、更生保護女性会、民生委員・児童委員協議会、子育てネットワーク等の定例会にお邪魔しました。発達障がいのお子さんの親の会、手をつなぐ育成会の方にもお声がけをさせていただいて養成講座にご参加いただきました。

また、最初の申込受付が60代の方が多く、年齢の幅を広げる為に教頭会に出席し、中学校での養成講座のチラシ配布をお願いしました。そのお蔭もあって、現在13名のビジターさんは年齢層も今までの経験も様々な方にご参加いただけました。

養成講座では、1回目に書いた自己紹介を毎回貼ってあるのですが、回を重ねるごとにどんどん書き足されています。また、お誕生日の方がいたので、参加者の方の手作りケーキでサプライズパーティーもしました。8回の講座の講師の皆さんはステキな方ばかりで、「自分たちだけで聞くのはもったいないね」という感想もありました。オーガナイザーと

の信頼関係はもちろんビジター同士の絆も深まり、スキームとして一つにまとまっていくのを毎回実感しています。ビジターは無償の活動ながら、皆さんその活動へのやりがいに期待を膨らませています。

ビジターのスキルアップ講座

ホームスタート・こしがや 中本美智子

ホームスタート・こしがやでは、20名のホームビジターが活動していますが、全員がより質の高い活動をするために、スキルアップ講座は欠かせないものとなっています。

今年度も外部研修の他に月1回程度の講座を行ってきました。越谷のホームスタート活動の特徴のひとつは、困難家庭からの依頼が比較的多いことです。そのため、ビジターにも高度で多様な対応が求められることをふまえ、万全の態勢で臨めるよう準備しておかなければならない状況です。

これらの観点から、ホームスタートの基本である傾聴と協働のフォローアップ・子どもと楽しく遊ぶコツなど、定期的に行っている講座内容も織り交ぜながら、DVの問題点とその対応（講師：男女共同参画支援センター所長）・障がいを持った子やその親への対応と地域連携（講師：小学校校長・特別支援学校教諭・障がい児の親）・産後鬱の理解と対応（講師：助産師）等、地域で活動されている専門家の方々や保護者の方にも講義していただき、各ビジターの新たなエネルギーとなっています。

ビジターも講師も、お互いの活動を知ることにより、その後の連携にもつながっています。

利用者や地域への周知

ホームスタート・こしがや 近澤恵美子

「ホームスタート」は、申し込みがあったご家庭に訪問するものです。利用したいご本人から直接の申し込みを受けるケースと、関連機関からの紹介によるケースと2通りあります。どちらにせよ、必要とする家族へホームスタートを届けるためには、地域で、少しでも多くの方たちにこのホームスタートを知ってもらわなければなりません。

① 利用者への周知のために

ホームページはもちろんのこと、チラシやリーフレット等をさまざまな場所に置いたり、機会を見つけて配布をしています。

② 地域への周知のために

越谷では「支援の届かない家庭へのサポートのために地域連携の在り方を考える」と題して、ホームスタートの活動報告会を開きました。又、子育て支援者向けに「支援の届きにくい親子への関わり方講

座」(全4回)を開催し、その中でホームスタート運営委員に講師になってもらいました。

その他にも、地域でさまざまな活動している人たちにもホームスタートを理解してもらうように、『地域福祉協議会』や『社会教育委員会』『市民活動つなげる会』『子育て支援ネットワーク会議』等、関わっている委員会や会議で、ホームスタートについて話をさせていただきました。

③ 顔の見える関係で協力しあえる連携先をしっかりとつ

これらの活動により被災者支援をしている方の紹介で、数件の避難家族と出会うことができたり、国際交流に関わる方にホームスタートをお知らせできたり、少しずつではありますが、ホームスタートを知っている方が増えてきています。利用家庭を関係機関につなぐケースが数件続いたこともあり、顔の見える関係で協力しあえる連携先をしっかりとつこの重要性を日々感じているところです。地域で、より多くの人たちがホームスタートを知り、関わってくれる人が増えるということは、子育てを支える人材が増えていくことにもつながります。

★様々な場所にチラシを置く

市役所、児童館、図書館、公民館、子育て支援センター、保健センター、保育ステーション、子育てひろば、市民会館、運動施設ベビールーム、ショッピングセンター赤ちゃん休憩室、市民活動支援センター、男女共同参画支援センター

★機会をみつけて配布する

1歳半健診、ショッピングセンター内のおはなし会、親子サークル、親子講座、協働フェスタ、市民活動支援センターイベント、赤ちゃん相談、子育てフェスタ、七夕フェスタ

ホームスタート・こしがやの利用者募集案内



行政との連携

ホームスタート・かぞ 木村弘美

① 社会福祉法人としての歴史を土台に

社会福祉法人愛の泉は、多様化する福祉ニーズを捉えながら、地域に根差した福祉の推進に努めてきました。昭和20年に児童養護施設愛泉寮として始まり、その後、保育所、乳児院、各種高齢者向け施設等を順次開設し、現在では、地域子育て支援事業、放課後児童健全育成事業、児童家庭支援センター、病後児保育室等を含む5施設18事業が開設されています。法人の基本方針である児童部門におけるアウトリーチを模索しボランティア育成の展開を考えていた時に、「ホームスタート」に出会い、この事業の必要性を強く感じたことから実現に至りました。

② 時間をかけて地域連携を

このホームスタート事業を展開していくためには、市内において展開されている既存の子育て支援事業との連携が重要と考え、加須市子育て支援課と共に、加須市及び近隣地域へ向けてのこの事業についての周知方法や、行政と民間との協働における関係機関との連携の取り方、そして安定した組織運営についての検討を重ねてきました。

保健、福祉、教育分野等の関係機関には、ホームスタートへの理解や傾聴活動についての学びを深めることを目的とした「家庭訪問型子育て支援ホームスタートについて」「心の声が聴こえるビジターとして～ビジターの心の健康管理～」というテーマの、多職種対象の公開研修会に参加いただきました。参加者からは、学習の場としてだけでなく、実践者同士が緩やかに繋がり相互理解を深めるきっかけとなったという声が寄せられました。また、加須保健所、加須市内の保健センターの保健師には、講師としてビジターの養成に関わっていただき、地域の機関が協力して地域の人材を育てていく実践的活動となっています。

加えて、近隣市町村関係者にもホームスタートについての公開研修会等への継続的な参加をいただき、この事業の普及のための周知も図られてきています。このように時間をかけながら、関係機関の皆様と共にホームスタートの必要性について考え、話し合う機会を重ねてきました。

平成24年度は、行政担当課へのビジター養成講座や継続研修講師派遣依頼の他、公開講演会、地域関係機関とビジターとの交流会、主任児童委員や地域関係機関との公開研修会、活動報告会等を開催しました。

また加須市子育て支援課や、当推進協議会の協力団体であるさいたまコープと共に、東日本大震災により福島県から避難されこの地域で暮らす方々が避難をされている間少しでも安心した生活が送れるための加須市近隣地域についての情報発信や、情報交換のための親子の交流の場の提供等に取り組みました。

③ 「誰がやるかではなく、どのように進めていくか」を大切に

地域関係機関との連携は、地域福祉という広い視点から自分たちの取り組みを見つめ、傾聴と協働におけるご利用者の立場に立った支援とは何かについて深く考える機会となりました。

行政担当者からいただいた“誰がやるかではなく、どのように進めていくかが重要である”という言葉は、地域連携に欠かせない視点であると思います。

それぞれの機関には専門的役割があり、一方で、一人の力や一つの機関において出来ることには限界があります。他機関の皆様と繋がることによって総合的な支援体制が重層的・多面的に広がると共に、関係者自身のエンパワーメントにもなりました。更には、互いの深い理解がこうした事業を発展させる力となったことも実感しています。

行政や関係機関との連携は、部分的に存在する子育ての社会資源が繋がることで、子育て家庭の様々なニーズに応じた多様な働きが可能になることが期待できると考えております。今後も、子育て家庭への総合的な支援体制の構築に向けて、この地域における子育て支援ネットワークが展開されることを願っています。



地域関係機関とビジターの交流会

ケースをマネジメント ～困難事例に出会ったときのために

ホームスタート・わこう 森田圭子

ホームスタートはフレンドシップに基づくピアサポートです。当事者同士の傾聴と協働による支援は効果の見込まれる方法ですが、家族の問題の改善にそれだけでは不十分な場合もあります。訪問で家の中に入り信頼関係が深まってくると、子育ての悩みの背景に、傍からはなかなか窺い知れない複雑で困難な課題が見えてきたり、打ち明けられたりすることがあります。

家庭の中に入るということはそのような状況に出

会うことがあるということで、私たちには、個人情報扱うということへの慎重な姿勢と両輪で、必要時にホームスタートだけで家族の支援を抱え込んでしまわないような取り組みや連携体制づくりが求められています。

ホームスタートわこうでは、支援の内容はオーガナイザーと訪問するビジターだけが取扱うことができ、質の担保のために自団体のトラスティでもある臨床心理士からスーパービジョンを受けられるようにしています。加えて専門的な支援資源や、子育て支援拠点、保育サービスなどの他事業と日頃からの関係性を持っていることは訪問支援に取り組むうえでは欠かせないことだと痛切に感じています。

ホームスタート・わこうの体制づくり

1、オーガナイザーの複数制

◎利用家庭は担当制。2名のオーガナイザーで登録ビジターの訪問先マッチングや、対応内容の相談をします。(今年度1名増)

2、スーパービジョン(支援の質を担保するための具体的な支援内容に関する示唆)

◎臨床心理士による訪問支援内容のスーパービジョンを行っています。

3、運営委員(トラスティ)会議の設置

(ホームスタートの周知、他機関との関係づくり、運営の安定化、質の担保などについて助言やサポートを行う機関)

◎臨床心理士(スーパーバイザー)、大学教員、保健師、行政職員、自団体理事、およびオーガナイザーの構成で年間に2、3回の会議を開催しています。

4、和光市要保護児童対策協議会(要対協と表記)への参画

◎特定非営利活動法人わこう子育てネットワーク(ホームスタートわこう運営団体)は地域の子育て支援NPOとして実務者会議に参画しています。ホームスタートに限らず法の下で必要な場合は要対協のルールに従って他機関と協働して問題解決にあたっています。今年度は研修企画を行い埼玉ホームスタート推進協議会の一員として、推進委員でもある日本社会事業大学の宮島清先生を講師に、児童虐待防止研修とホームスタート事業の説明研修を提供しました。(12月11日13時半～16時、和光市役所、要対協構成委員45名の参加)

5、連携する事業や機関

◎乳幼児全戸訪問事業(事業チラシ配布、利用紹介)、養育家庭訪問事業(利用紹介)

◎和光市、和光市保健センター、和光市ファミリーサポートセンター、わこう助産院、各子育て支援拠点、市内保育園、民生児童委員・主任児童委員、他子どもNPO等。

Ⅳ 事例検討「ホームスタートはなぜ問題解決のきっかけになるのか」

1 ホームスタートの「事例」をどのように公開すべきか

家庭訪問型子育て支援ホームスタートでは、0歳から6歳までの子育てをしている利用者のニーズを、本人の記入やオーガナイザーの聞き取りによって14項目（複数記入可）に整理します。それによって、利用者自身がニーズを自覚するとともに、それに基づいて支援の方向性を決め、「仲間」「友人」としてのホームビジターが家庭に出向いて協働と傾聴を行うという支援方法をとっています。

私たちはこの事業を展開しながら、専門職の支援とは別の効果があるのだと感じています。

しかしその効果について「利用者がみるみる元

気になる」とか「表情が明るくなって別人のようになった」などと表現したとしても具体性に欠け、逆に、より具体的な支援内容や効果についてお伝えしようとする、どうしても個人情報のある程度公開しなければならないというジレンマに陥っていました。

個人情報を守りながらホームスタートの効果について具体的に述べることはできないだろうかと考え、埼玉ホームスタート推進協議会の訪問支援を行っている3スキーム（ホームスタート・わこう、かぞ、こしがや）の事例の整理を検討しました。

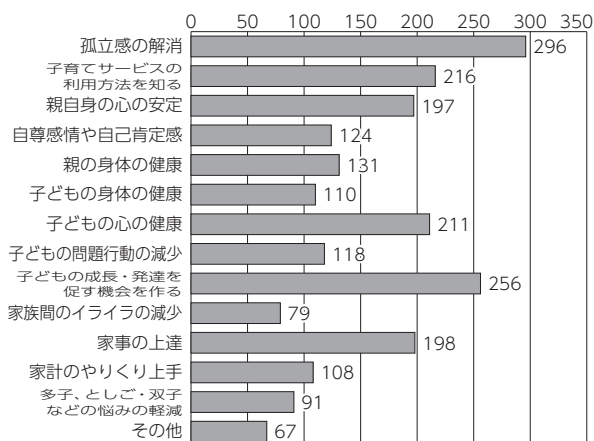
2 最も多い「孤立感を解消したい」というニーズを用いて

私たちはホームスタート・ジャパン（HSJ）が開発したHS-QISS（Quality Improvement & Scheme Support）システムにより、開始から2012年6月30日の集計期間に、全国のスキームと埼玉の3スキームで集計した「利用者のニーズ14項目」で、共に最も多かった「孤立感を解消したい」というニーズに着目しました。

このニーズは、例えば自己肯定感をもてなかつたり、お子さんに障がいがある、家族とうまくいかないなど、利用者のさまざまな状況との関連が深いことは、これまでの活動からも示唆されています。そこでこの1項目に着目し、事例の整理を試みることにしました。

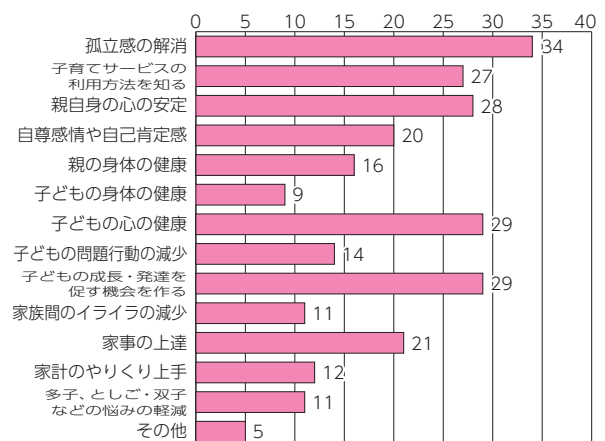
★全国の利用者ニーズ数集計（開始～2012/6/30）

対象件数は490件、全ニーズの総数は2202件
（集計：NPO法人ホームスタート・ジャパン）



★埼玉3スキームの利用者ニーズ数集計（開始～2012/6/30）

対象件数は60件、全ニーズの総数は266件
（集計：NPO法人ホームスタート・ジャパン）



3 事例の検討

事例検討の方法として、「孤立感を解消したい」というニーズに関して、

- 1) どんな孤立感なのか～利用者の具体的な状況
- 2) どのような対応をしたのか～オーガナイザーとホームビジターによる支援内容
- 3) 利用者はどのように変化をしたか

について、市村彰英先生（埼玉県立大学保健医療福

祉学部社会福祉学科教授 臨床心理士）のご指導のもと、KJ法により整理を行いました。

1)と3)は、できる限り利用者のことばに沿った内容を付箋に書き込みました。

また今回3スキームが持ち寄った「自分自身の孤立感を解消したい」という項目にチェックが入った事例は、全体で12例です。

1) どんな孤立感なのか～利用者の具体的な状況

「孤立感を解消したい」といっても、その孤立は多種多様であり、その人その人のさまざまな理由が重

複しての孤立です。またその人によって孤立の感じ方や度合いが異なります。

話し相手がいない

【友達がいらない】 ママ友がいらない、引っ越してきたばかりで知り合いがいらない、転入してきて友達がいない、地域に知り合いがいらない、話し相手がなくて煮詰まる、私の話を聴いてくれるひとがいらない

【人と付き合うのが苦手】 今日（オーガナイザーと会って）ときどきしています、たくさんの中に行くのは苦手、学生時代から友達づきあいが不得意、自分から他の人に声をかけられない、話し相手がいない、多くの人がいるところには行けないし入れない、近所との人間関係のなかで傷ついている、自分は発達障害かと思う、自分は他の人と違って変わった性格だと思う、人が大勢いるところにいられない、同じマンションの遊び場にも出られない、気楽に話せる人がほしい、相談する人がいない

外出できない

【育児がいっぱい、いっぱい】 子どもと出かけることに慣れていない、1日の大半を子どもと母親だけで過ごしている

【ふたご、年子】 双子を連れて出かけられない、双子+兄で出かけるのがたいへん、双子が小さくて外出できない、（今まで上の子とひろばに行けていたのに）年子が生まれたから行かなくなった

【自身の体調】 体調が悪くて外に出られない、母親の体調が悪くて外出できず人と話す機会がない、一人では外に行かれない

親世代との関係

【環境的に遠い】 身内が近くにいない、実家が遠い、実家には帰りたいけど帰るのがたいへん、実家が離れている

【心理的に遠い】 姑の対応に傷ついてしまったし実家でも孤立感がある、震災後家族がバラバラになり母子のみで生活、親が高齢で話してもわからない、親が高齢で心配かけられない、親に自分のつらさを隠してきた、両親が離婚している、実母と話す機会がない

ハイリスクの自覚

【誰かに助けてほしい】 第三者の目がほしい、応援してくれる人がほしい

【生きることに疲れている】 生きることに疲れている、どうでもいい、消えてなくなりたい、専業主婦は気楽そうに見える、仕事が忙しい、他の人は子どもの成長を楽しんでいるが私はどうでも良いと思ってしまう、うつ傾向

育児スキル

【育児がわからない】 初めての育児でわからない、自分の子育てに自信がもてない（これでいいのかわかるか？）

少数派

【話が合わない】 ひとり親として自分の話を聴いてくれる人がほしい、多胎育児について話せる人がいない、自分は高齢出産で周囲と話が合わないような気がする、ひろばで話をしたら共感を得られなかった

【価値観の違い】 放射能のことが気になるけど誰に相談したらよいかかわからない、放射能は絶対ダメという友達の話を聞いてグラグラ

「孤立」がさまざまであるように、その訴えの背景にあるものもまた違います。たった12例であっても、このように様々な孤立感の状況が挙がってくるのです。

ここでたいへん重要なのは、オーガナイザーが果たす役割です。オーガナイザーは「利用申し込み」「初回訪問」などによって、利用者のニーズを整理しその後の支援を見立てます。

例えば、「双子が家族に加わったことで起きる孤立」は多胎育児家庭でしばしばみられますが、複数の乳幼児がいることで外に出にくくなってしまった物理的な孤立感なのか、双子育児のたいへんさをわ

かってもらえない社会的な孤立感なのか（多くの場合その両方ですが、いま最も感じているのは何か）をオーガナイザーが丁寧に整理することで、その後の支援は全く変わってきます。また「外出したい」というニーズでも、出かけるための方法を一緒に考えてほしいのか、出かけるための勇気が必要なのか、外に行きたい気持ちがあっても利用者自身の体調が振るわないのかでは、支援の内容が異なるのです。

このように、利用者のニーズとそれを取りまく状況を、オーガナイザーが見立て、支援に反映していくことで、各々のニーズに合った有効な支援に繋がっていくことが可能になります。

2) どのような対応をしたのか～オーガナイザーとホームビジターによる支援内容

前述のようなニーズの背景を踏まえ、さらに利用者がそれを解消するために「こうしたい」という希望を基に、その後の支援を組立てます。支援内容を決めるのは、利用者自身とオーガナイザーで、それに沿って実際に支援をするのはホームビジター（訪問ボランティア）です。

ではこの12例において「孤立感を解消したい」というニーズに関して、どのような支援を展開したのでしょうか。

ホームスタートの支援は基本的に「傾聴」と「協働」です。しかしその内容はやはり利用者のニーズに応じて様々と言えるでしょう。

傾聴

【受容】 自分（HV）の話はせずただひたすら聴いた、母がしたい話を聴く、利用者本人の昔話（身の上話）、不安を聴く、悩みを聴く、双子育児についての話を聴く、母親へのタッチング

【一緒にいる】 大人同士の交流の提供、何ともしない話をずっとしていた、話し相手になった、母子に関わり一緒に居ながら見守る

【共感、共有】 上手に子育てしていることを伝える、ご主人に偶然会ったのでその感想を話す、旦那さんのグチを語りあった、子どもの成長を言葉にして伝える

協働

【家事】 夕飯を一緒につくる、お菓子作りを一緒にする

【母に寄り添う外出】 近くの児童館に行きがてらおしゃべりしつつ散歩した、バスに乗って子育てひろばに行った、予防接種の付き添い、外出するお手伝い（外出の段取りを一緒に考える）、双子の一人をいつも担当して連れていった、ランチをレストランで一緒に食べた、ショッピングに付き合った、洋服を買いに行った、一緒に電車に乗って隣町までショッピングに出かけた、趣味の講習会に一緒に行った

【子どもと遊ぶ】 母子とビジターとで一緒に遊ぶ、子どもと室内で遊ぶ、上の子と遊ぶ、引っ越しの準備中の子どもの見守り、子ども3人を連れて毎回公園に出かけた（ふだん外出していない）、公園に連れていって一緒に遊ぶ、公園やマンションのひろばで遊んだ

アドバイス・情報提供

【地域について】 地元の話をした、ひろばや児童館を紹介した

【子育てについて】 経験談を話す、子育ての話を聞かれてビジターの経験を話した、母乳とミルクの与え方について相談にのった

【家事について】 料理のアドバイスをした

つなぐ

【友達づくり】 公園で会った同年代のママに話しかけてつないだ

【機関連携（同行）】 民生委員が家に来たとき一緒にいる、子育て支援課やケースワーカーのところに一緒に行く

【地域連携（紹介）】 ファミサポにつなぐ、民生委員につなぐ、子育て支援課につなぐ

傾聴といっても、ひたすら利用者の話を聴くこともあれば、ホームビジターの経験談などによって同じ子育ての仲間として共感し合うこともあります。また一人の友人として利用者を大切に思いながらも一緒に過ごす、ということもあります。また協働においても、利用者と調理などを一緒にすることも

あれば、母子と一緒に遊ぶことでロールモデルとしての役割を果たすこともあります。

さらに傾聴や協働ののち、必要であれば情報提供や他機関との連携を行うことで、利用者の個々のニーズにより応えていくことができます。

3) 利用者はどのように変化をしたか

では、1) の状況をふまえ、2) のようにそれぞれのニーズに応じた支援をした結果、利用者はどのように変化したのでしょうか。

今回の方法で事例を整理した結果、「行動が変わった」「認識が変わった」という2つのカテゴリーに整理することができました。これらの変容は利用者の「子育て観」のみならず、生きていくうえでの大切ないくつかの要素を呼び戻したのではないかと考えられます。子育てや引っ越しなどさまざまな環境の変化や、長く続いている対人関係の悩みなどによっ

て、子育てに前向きになれなかったり自分自身を見失っていた利用者も、個々の状況に応じて丁寧に寄り添うことによって、自身の力を引き出し、さらに自身の意欲を向上させているのです。

ホームスタートは利用者本人の自己実現したい意欲(思い、願い)をくみ取り、オーガナイザーやホームビジターがそれを尊重し、本人の希望に添った支援で寄り添う仕組みによって、利用者本人をエンパワーメントすることが整理されたのではないかと考えられます。(事務局 田中輝子)

行動が変わった

【自己開示】 パニック障害を打ち明けた

【自分らしさを取り戻す】 花を育て始めた、ビジターが帰宅する時は笑顔になっている、お化粧をするようになった、話していると元気が出てくる、パートナーに甘えることができるようになった、きれいになった、段々とおしゃれに気を使えるようになってきた、表情が明るくなった、気持ちが変わると体調も良くなると実感した

【救助表現ができるようになった(ヘルピングスキルの向上)】

自分の困りごとを受け止めてくれるという実感がもてた、困ったときにはまた連絡すればいいと思うと安心できる、困りごとを言葉にして伝えることができるようになった、助けてというサインを出しても良いと感じた、パートナーにアサーティブな表現をできるようになった

【自信がついた】 他の母の悩みを聴いていた、子育てサロンなどに出かけてみたいと自分の希望を伝えられるようになった、自分で子育てひろばや児童館に行くようになった、自分から他のお母さんに話しかけられるようになった、子育てひろばに行けるようになった、子育て中の人に会って話すことができ良かったと思えた

【自己決定】 閉め切っていた窓が開き外に洗濯物を干していた、自分で他の支援を利用するようになった(行動的になった)、転職する気になった、夕飯を作ろうと思えてきた、親元の近くに引っ越すことに決めた

認識が変わった

【信頼感の深まり】 充分聴いてもらって安心した、話すことが楽しくなった、来てもらって嬉しい有難かったと言う、話ができてストレスが減った、メール交換する人ができた、頼れるところが増えた、自分の子は意外に誰にでもなつくのだということがわかった、双子の苦労は続けられど話ができて心が軽くなった、ひとりじゃないと思えた、子どもがビジターととても仲良くなった、一緒にいてくれる人がいるという実感をもてた、ビジターと本当の友人になったように思えた

【達成感】 一緒に電車に乗って嬉しかった

【自己決定】 悩みはあるがそのままでも良いと思えた、自分の子育てのやり方は間違っていないと自信がついた、育児ってこんな感じでいいかな…と思えた、今の自分でも良いと思えるようになった、自分の悩みは特別でないと思えるようになった、また下の子が生まれる前のようにできると思う、まだ問題はあがあるが大きな悩みにならなくなった

【視野が広がった】 引っ越しに対して前向きになった、ストレス解消になった、ビジターになってみたい、将来への期待を語れるようになった、自分のなかの「〇〇したい」が増えた、自分の将来について考えられるようになった、いろいろな子育ての仕方があると思えるようになった

4 ビーイング (being) とドゥーイング (doing)

市村彰英 (埼玉県立大学保健医療福祉学部社会福祉学科教授 臨床心理士)

私は3年前くらいからホームスタートの運営委員をさせていただいております。運営委員会ではいつも熱心なホームビジターとオーガナイザーの活躍を目の当たりにし感心の連続です。彼女たちは利用者さんのニーズがあれば自ら足を運ぶ関わりをしています。「アウトリーチ型の支援」という言い方をする場合もありますが、そんなふうと言うより、ごく自然に足を運んでいるという感じなのです。専門職の仕事とはちがう、地域に根差した一人の住民として同じ目線で暖かく利用者さんに関わっているのです。

換言すれば、ホームビジターたちは利用者さんのニーズを実に大切に扱っており、そのニーズについて傾聴しているのです。すなわち利用者さんは自分のニーズがしっかりと受け止められている、自分は大切にされているという感覚を持つこととなります。そして大変さ、辛さ、心細さをわかってくれている人がここにいる (存在する) という支えが得られるのです。この支えのことをビーイング (being) と言います。

また必要に応じて利用者さんと行動を共にする (協働する) こともあります。料理をしたり、買い物をしたり、子どもと遊んだり…。この支えをドゥーイング (doing) と言います。このごく自然な利用者さんとの時間の共有が利用者さんにとってはとても居心地がよいものと感じられるのです。この2つの関わりをほどよく持つことで、利用者さんのニーズが満たされていくのです。

2012年12月27日 (木) の午後、私はホームスタートの関係者の方々、埼玉のオーガナイザーの方々と一堂に会し、約3時間に亘って協働作業をしました。その日はホームスタートのスタッフたちがお茶とお菓子を持参し、私のところに足を運んでくださいました。熱心な女性の意気込みを肌を感じ、あっという間に時間が経過しました。皆さん一生懸命に取り組み、一杯頭を使って考え、出来上がったのがここでご紹介している結果です。

利用者さんのニーズのトップが「孤立感を解消したい」でした。いろいろな「孤立感」があります。「孤立感」とはどのようなことでしょうか。三省堂「大辞林」で「孤立」と引くと、「仲間がなく、一つだけで存在すること。『一人だけ孤立した状態になる』と

記されています。「孤立感」を持った利用者さんは一人ぼっちでとても心細いと感じています。一言で「孤立感」と言っても、いろいろな孤立感があります。

ここでご紹介しているのは、利用者さん一人ひとりの「孤立感」ってどんなものなのかということ、ビジターやオーガナイザーが足を運んで実際に関わったケースを整理する中で具体的に考えてみようという試みです。彼女たちが関わった利用者さん自身の語った言葉をどんと付箋に書き出し、模造紙に張り付けていくのです。そうするといろいろな利用者さんが語っている「孤立感」の表現があるまとまりごとに整理されていくのです。

さらにその孤立感にどのように関わり、どのような変化が生じたかということも書き出していくと、それらもあるまとまりに整理されていくのです。ビジターやオーガナイザーが利用者さんへの丁寧な傾聴を行うことで、利用者さんは自分の胸の内を言葉にして彼女たちに語りながら、少しずつ自分自身の認識が変わっていきます。次にニーズを共有した上で彼女たちと協働することによって少しずつ行動が変化していくのです。利用者さんのいろいろな問題を探すのではなく、できていることを探し、もっとできるようにしていくエンパワメントをしているのです。彼女たちがやってきたことがどういうことだったのかということの意味がそこには現われてくるのです。ホームスタートの仲間たちの協働作業なのです。すばらしい体験をさせていただき、感謝しております。



事例検討ワークの様子

V 990人の回答「地域での子育てと支援に関するアンケート」から見えたこと

1 目的 ～訪問型子育て支援へのニーズはあるのだろうか

埼玉ホームスタート推進協議会では、平成23年度、24年度の2年間、埼玉県内にホームスタート（家庭訪問型子育て支援）の活動を広げることを目的に、各地で講演会などを開催してきました。その中で、よく質問として出されるのが、実際に訪問型の支援を利用したいという方はどの位いるのか？ということです。

既に活動をしているスキーム（団体）には、直接ご本人からのお申し込みや、子育て支援拠点などからのご紹介を経て、利用の希望が寄せられています。

けれども、近所づきあいなどもしにくい社会の中では、「家に来られるのは嫌だと感じる人も多いのではないか」「直接家庭を訪問する子育て支援は日本ではなかなか受け入れられないのではないのか」という支援者側からの声も、度々聞かれます。

そこで、埼玉県内に住む子育て中の方々の、「子育て支援メニューの利用状況」や「家庭訪問型子育て支援に対するニーズの有無」などについて、アンケートを実施いたしました。

2 方法 ～個別宅配で赤ちゃん割引を利用されている子育て当事者世代の皆さんを対象に

埼玉ホームスタート推進協議会の構成団体でもある生活協同組合さいたまコープには、子育て応援の目的から、個人宅配を利用する組合員さんが妊娠中からでも2年間活用できる「くらし応援 赤ちゃん割引」があります。このサービスを活用している方は、妊娠中か、2歳代までのお子さんがいらっしゃる世帯となり、登録世帯は約19000世帯です。今回、埼玉県ホームスタート推進協議会で子育て中の家族のニーズ調査を検討するということになり、さいたまコープの赤ちゃん割引ご利用組合員さんを対象にと、ご協力の提案をいただきました。

アンケートは、9月下旬から10月上旬に、さいたまコープの個人宅配で赤ちゃん割引をご利用の組合員さんの注文書に同封することとしました。既にホームスタート実施団体がある、朝霞センターエリア（和光市、朝霞市、新座市、富士見市、志木市）に1978枚、久喜センターエリア（加須市、久喜市、蓮田市、白岡市）に887枚、草加センターエリア（越谷市、草加市）に1673枚、合計4538枚のアンケートを配布しました。回収は個人情報に配慮して、個別に郵送で埼玉ホームスタート事務局に、10月末日を目安に返信していただきました。小さいお子さんがいるご家族にもかかわらず、ポスト投函で返信

してくださったアンケートは990通、21.8%の回収率となりました。子育て中の合間を縫っての返信に感謝すると共に、関心の高さを感じました。集計は、同じく埼玉ホームスタート推進協議会のメンバーで、ホームスタート・かぞとしても活動している社会福祉法人愛の泉で担当しました。さらにアンケートの解析及び考察については、公益財団法人生活協同組合総合研究所研究員の近本聡子氏にお願いいたしました。

埼玉ホームスタート推進協議会では、今回約1000名からの回答を得られたことで、県内では子育て支援拠点事業が予想以上に浸透していること、またホームスタートのような訪問型の活動を必要としている当事者が少なからずいることなどを、改めて知ることができました。

ご回答を寄せてくださった皆様の声を、今後の活動に活かしていくことをお約束して、感謝のこぼれとさせていただきます。

（アンケート調査担当 雲雀信子）

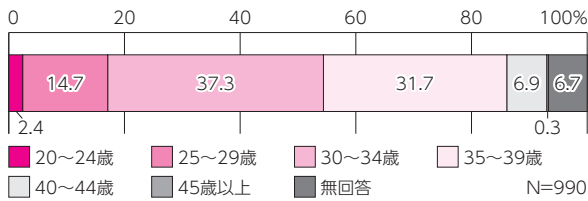
3 報告 ～「いまだきママとプレママと4人のパパ」～アンケート調査の結果から 近本聡子 (公益財団法人生協総合研究所 研究員)

1) どんなくらしと意識でしょう？

今回の調査に参加してくださったのは、埼玉県内の3つの地域(詳しくは前頁)で子育てをしている、あるいはこれから子育てをすることになる皆さん990人です。99%が女性ですが、4人の男性もいました(拍手!)。まず、どんな方が回答してくださったかをみてみましょう。

(1) 30歳代が中心

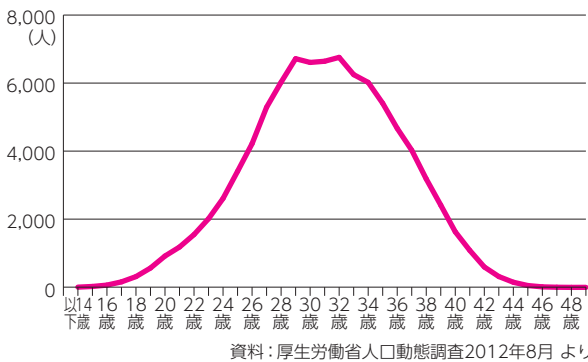
(図1) 回答者の年齢構成



回答してくださったみなさんの年齢は30代前半が中心で、37%です。今、日本では89歳までの既婚女性をベースにすると20代はたった3%しかいません。それだけ20歳代の未婚率が増加しています。日本全体、埼玉県も、子育て開始が30歳くらいの方が一番多い現状です。それに照らすと、この調査の回答者も「日本の子育て入門世代」とドンピシャな年齢構成です。

実は年間で子どもを出産した人の年齢をみてみると、32歳をピークにしたきれいな山形になります。

(図2) 母の出産年齢別出生児数

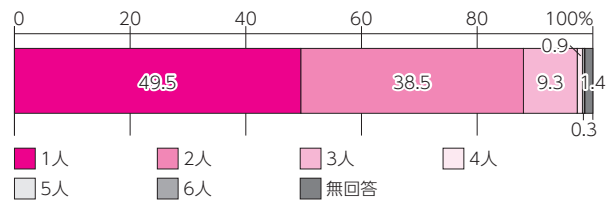


20歳くらいの若い層と40前かけこみ出産が多いのかな?と想像している方もあるかもしれません。

(2) 1人めの子育て中! という方が半数

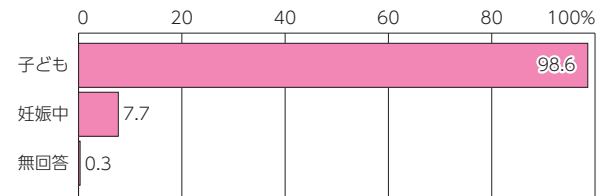
子育て真っ最中の人たちの調査ですので、1人目の子育てがほぼ半分、2人育てているという人が38.5%で合わせるとほぼ9割になります(図3)。日本では、理想の子ども数は2.4人ですが実際産んだ平均の子ども数が2人を割って1.96人になりました(第14回出生動向基本調査 国立社会保障・人口問題研究所による完結出生児数、つまり夫婦で子どもを産み終わった子どもの数)。

(図3) 現在の子どもの数



この調査では、妊娠中の人(プレママ)も8%ほどいます。

(図4) 子どもがいる人・妊娠している人



執筆者略歴

近本 聡子 (ちかもと・さとこ)

公益財団法人生協総合研究所研究員 都留文科大学・立教大学講師

専門分野は社会学, 社会調査論, 家族社会学, ジェンダー論, 子育て支援。近著に「地域で子育て」をめぐる支えあいの循環をどのように構築するか」生協総研レポート 2011年6月発行。
子育て初期の女性がケアワークや地域の資源作りを経てエンパワされる事例を研究。また、子育て期のジェンダーバランスの悪さ(父母の分離した役割分担)の解消についても研究している。

2) 子育て期の孤立をふせぐ ― 視点1 社会とのつながり

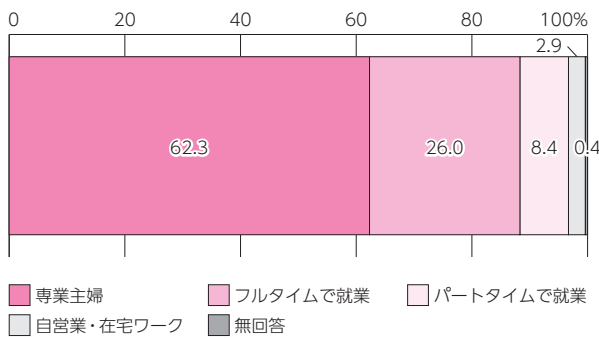
子育て中のママたちを考えると、その人が社会とどのような接点をもっているのかをみることは、とても重要です。

特に、これまでの研究では、仕事を続けている人よりも、仕事をやめたり中断している人のほうが「育児不安」が強く、「社会から取り残されている」という率も高いという結果が多いです。子育てひろばのママたちの声にも「ここにきてやっと大人の人としゃべることができて、嬉しい！」という感想がよく見られます。子どもと2人きりの状態は<母子カプセル>と呼ばれますが、社会とのつながりが希薄な状況です。今回の調査では、どうでしょうか？

(1) 仕事を休止中の人62%

回答者の働き方をみると、専業主婦の人が6割強、フルタイム、パート、自営や在宅ワーク、と続きます。

(図5) 回答者の就業状況



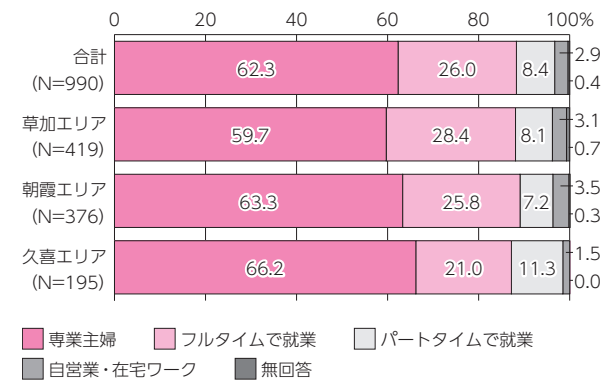
専業主婦の比率が最も高かった高度経済成長期は、子育て期の女性の9割くらいが専業主婦でしたが、最近はやや減少しています。それでも、やはり専業主婦の人が多数派です。仕事での人間関係がないぶん、近所の知り合いやママ友など、地域社会でのつながりがまだ少ないかもしれません。

今回の調査でも働いているのは4割弱の人で、フルタイム勤務の257人のうち56%が今、休暇取得中です。数は少ないですがパートタイマーの83人のうち17%が休暇中で残りの人は働いています。

パートという形態でも、実際は週5日、1日6-8時間という人がもっとも多く、フルタイムよりわずかに少ないだけというのがこの調査で分かった現状です。

就業状況によって各種の子育て支援利用の状況が異なり、専業主婦層、特に子ども1人という人たちが利用していない率が高めです。

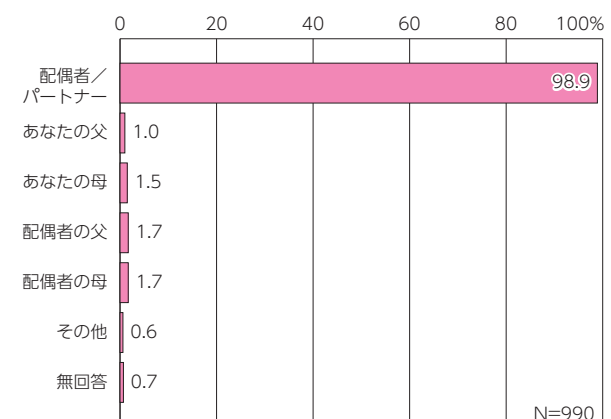
(図6) 回答者のエリア別就業状況



(2) 親世代とは独立した家族形成

この調査では配偶者またはパートナーと生計を共にしている回答者が98.9%です。親世代と一緒にくらしている場合でも、生計が別の人々がほとんどであることがわかります(図7)。新婚期は生計を独立させる意識が強いのかもかもしれません。別の調査では、どちらかの親の家に近居しているという人の率が3割くらいという結果もあります。同居や近居もくらしに影響がありますね。また、単身赴任の配偶者(夫が多数)をもつ人は1%と少ないようすでした。

(図7) 生計を共にしている家族はだれ？



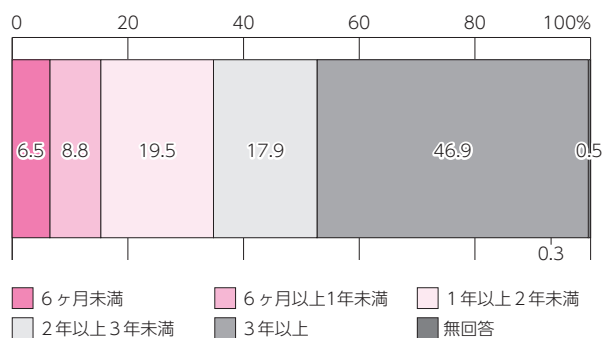
3) 子育て期の孤立を防ぐ — 視点2 新しい引っ越し先 子育ての不安感

今住んでいる地域での生活が長い人（地元育ちの人など）と短い人がいて、子育て支援施設のスタッフさんからは「新しい人のほうが支援を利用している」と聞きます。ママ友もまだ近くにいないし、あるいは仲良しの友人たちは遠くに住んでいるし、という状況は孤立につながりがちです。この調査でも、結婚して、家族をつくり、住みなれない地域で生活を始め、子どもが産まれる、というライフコースを、回答者の半分以上の人が体験したようです。

(1) 住み続けている地域ではない

この地域にずっといるという人は少数派のようです。3年以上暮らしているという回答は47%ではありますが、3年未満の人が52%、なかでも1年未満の人が全体の15%であることから、かなりの流入があるようです。

(図8) 現在の地域での居住期間



埼玉県地域の特徴として、結婚によって住居を定める人がおそらく多いのでしょう。夫婦の勤務先との関係や、親族との関係で地域が選ばれていますが、子育て夫婦にとって住居移動は高い確率で発生します。すると、見知らぬところで友人も遠くて実際には会いにくいという人がいそうです。

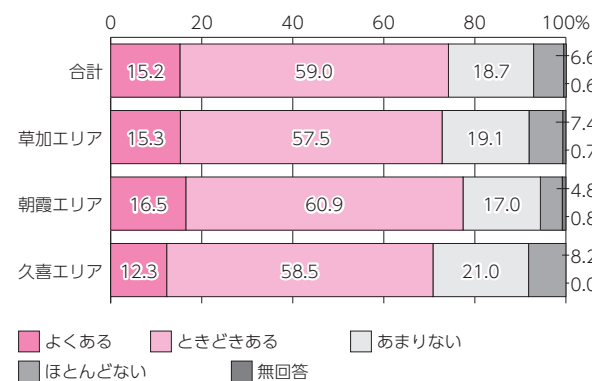
今回の調査では、子育てについて「とまどい・悩み」を「よく感じる」率（次に紹介）は、居住期間が短いほど高い傾向があります。一方で、「感じない」人も居住期間が短いと高く、他の条件が複雑に影響しているようです。

(2) 子育てのとまどい

子育てのとまどいをよく感じている人は15%、ときどき感じる人は59%と、合わせると74%となり、大きな数値になっています。「みんながとまどい悩むことのある子育て」ですね。

地域による差もあり、朝霞エリアでは合計77%と、やや高めです。地域の子育てインフラや支援インフラの密度も関連するかもしれません。自由記述にも、「行きたいけど子育てサロンが遠くてバスに乗ることを考えるといけない」、「児童館が遠い」、などの記入がみられます。全体にはまだまだ、支援施設の密度が低いこともうかがえます。

(図9) 子育てのとまどいや悩みがあるか (エリア別)



自由記入より

他県出身で近所にママ友もいません。サロンへ行っても結局すでにグループができていて、あまり話もできずに子どもを遊ばせて終わってしまいます。産後体調を崩し、家事がほとんど出来なかった際、遠方の母をなんとか呼んで乗り越えました。（ホームスタートなど家庭訪問型の）こうしたサービスがあることを初めて知ったのですが、手伝ってくれる内容や時間がどの程度なのかにより、二人目の出産の際などに利用してみたいと思いました。（年齢無回答、0歳児1人）

4) 子育て期の孤立を防ぐ — 視点3 話しあいて・援助する人

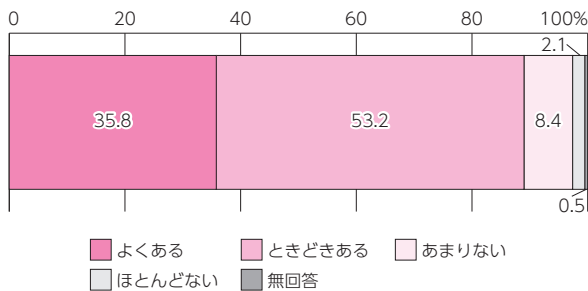
子育て中の孤立の中心となる、「話ができない」ようすがよく分かる結果になりました。孤軍奮闘しているのに、その話ができない、共有化されないことが多い様子です。

(1) たくさん話をしたい

子育て中は毎日が発見の連続だったり、しんどくて泣きたくなったりと、誰かに話をしたいですね。子育てについて誰かに話したいことが「よくある」人が36%、ときどきある人は半数以上の53%です。何と89%とほぼ9割の人はそんなことがあるのですね。

では「あ～、話したい」って意識してしまうのはどんな時でしょう。特に複数でいる場（家庭や職場や地域活動など）ですと、たいていのことは話せているので、話したいことがたまるということは少ないです。でも、子育て中の親は、まだ小さい子どもに話してもまるごと理解されることはないし、話をしたいと思うのです。

(図10) 子育てについて誰かに話したいと思うことがあるか

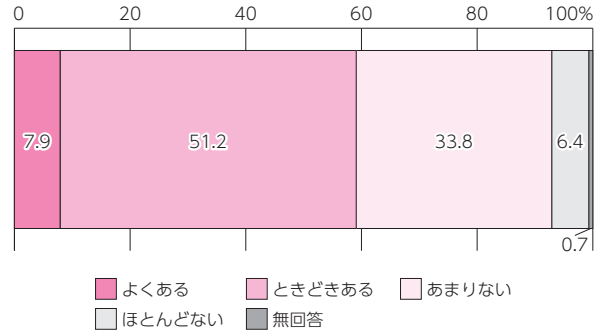


今回の調査では、子どもの数が1人の人のほうが、2人の人よりも話をしたいという率が高いのが注目されます。初めての子育てという状況のほうがやや新鮮であったり、不安であったりと話したいことが多いのではないのでしょうか。

(2) でも情報は不足

上記のように「話がしたい」人が多数ですが、子育て情報についてみると、情報不足を感じる人は「ときどき感じる」人を加えて半数以上です。情報を得ようと探すということは、何かしら課題に回答を求めため（漠然とした回答であっても）であることが多く、話しがしたいということと通じます。

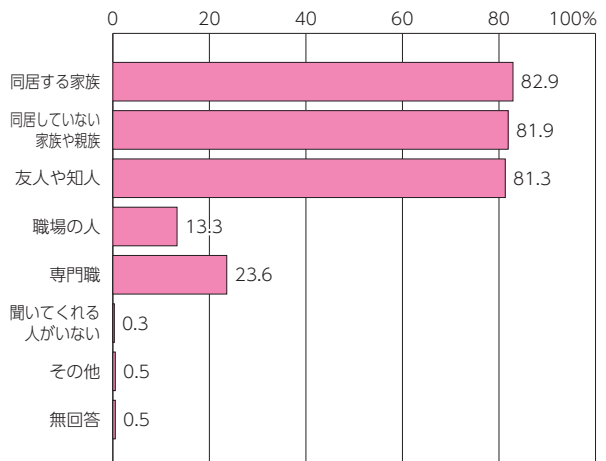
(図11) 子育ての情報不足を感じたことがあるか



育児や子育て情報は、ちまたにはあふれていますが、ずばりではない。そのような状況がうかがえるのではないのでしょうか。自由記入にも「探し回らなくても情報が得られるようになればいい」「家庭訪問型の支援があるなんて、知らなかったので、知る仕組みを何とかして欲しい」などの声がありました。

(3) 話を聞いてくれる人がいない 少数の人に注目

(図12) 実際に話を聞いてくれる人は誰？



実際には家族が聞いてくれるようですが、しっかり聞いてくれるのか、聞き流されるようなものか、会話はどんなレベルなのかな？ということも重要です。専門の人でも2割以上の方が聞いてくれる対象にしています。また、聞いてくれる人がいない3人(0.3%)が気になりますね。

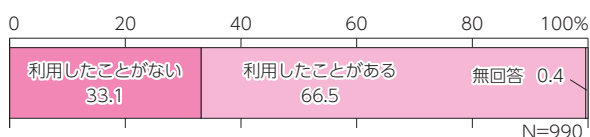
5) 子育て期の孤立をふせぐ ― 視点4 地域の資源 (使えるモノや人)

子育て支援の先進国では、地域に子育てする人のニーズに応じて様々な施設やしきみを提供しています。今、埼玉県の地域で活動しているみなさんも、大切なリソースです。たとえば、カナダのオンタリオ州では、小学校校区に一つ以上(都市部)のペアレンツリソースズという子育て支援の施設と支援者がいますが、埼玉県でも少しずつ増えてきています。

(1) 子育て支援サービスの利用

今回は子育て支援ニーズの非常に高い層が回答していると思われる、66%の回答者が「利用したことがある」と答えています。回収率が低めなので、回答していない残りの3500人が「利用していない」と回答したとしても658/4500(人)で約15%の利用率となり、10年前と比較するとリソースがかなり増えてきたと考えられます。

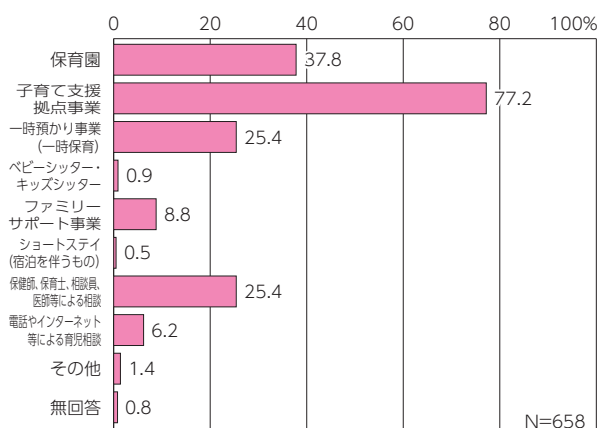
(図13) 子育て支援サービスの利用



また、興味深い点は、子どもの人数が2人の人のほうが3人以上の人よりも利用率71%と高率です。最近になって、利用しやすくなっているという社会動向があるものと思われます。1人の人は現在64%です。通常の調査では、経験年数が増えると利用も増えるのですが、今回は“こんにちは赤ちゃん事業”など支援策が年々登場しており、社会背景の変化が表れています。

(2) 支援拠点の利用率が高い

(図14) 利用したことがある支援サービス



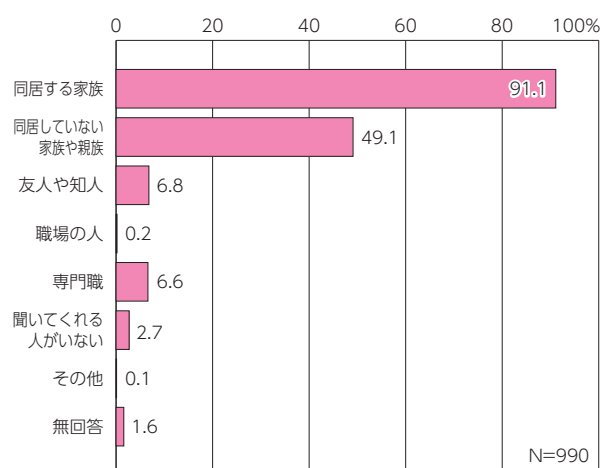
子育て支援サービスを利用したことがあると答えた人に、サービスの利用経験をきいてみました。結果としては、子育て支援拠点(ひろば)事業については、支援サービス利用者の77%の人が利用して10年前と比べると隔世の感があります。一時預かりや保育園などでの相談も利用率が高いといえます。

しかし、サービス自体を利用したことのない33%の人は自分で情報収集し、周囲への相談だけで暮らしているので、大きな困りごとなどができた時には、社会的な支援とのつながりを持ちにくいかもしれません。

(3) 一緒に何かをしてくれる人

話を聞くだけでなく、寄り添って家事や育児を一緒にしてくれる人はどのくらいいるのでしょうか。

(図15) 一緒にしてくれる人は?



話をきくという前ページのグラフと比較すると友人率が低いです。それは子育て世代は、周りも子育て中の人が多いからでしょう。話を聞いてくれるけれど、友人も行動を共にはできない時期。また特に、一緒になにかをしてくれる人がいない、という人27人(3%)、少数ではあるけれど注目です。

6) 家庭への子育て支援

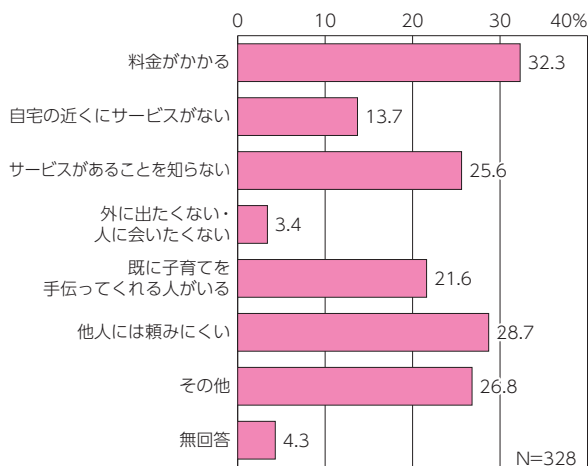
現在普及してきている子育て支援と、家庭訪問型支援を展開しているホームスタート活動がどのくらいの認知があり、ニーズがあるのかを探る項目です。この項目は詳細にみていきます。

(1) 子育て支援をどうして利用しない？

前ページでみたように、子育て支援サービスを利用していない人は全体の33%になっています。その人たちの理由をみてみましょう。

知らなかったという25%の人はきっとこれからいずれかにアプローチしていくと思いますが、やはり料金がかかるということがネックの人が32%で最多になっています。また、文化的な要因として「他人には頼みにくい」人が29%と親族以外の人に支援をしてもらうことに抵抗を感じてしまう人も多いようです。

(図16) 支援サービスを利用しない理由



また、ここでは3%の人が「外へ出たくない、人に会いたくない」と回答しており、そのように感じる人がサービスと繋がりをもてないままで存在していることは注目点です。

この間については、自由記述欄にも気持ちが書かれています。

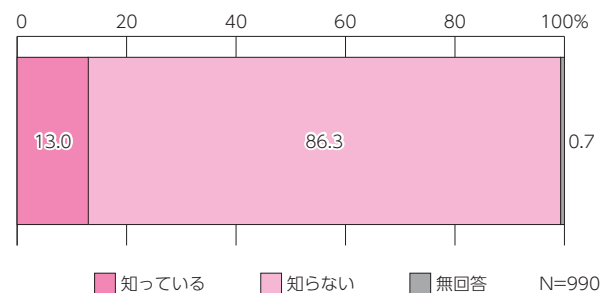
- ◆制度が分かりづらい、依頼方法が分からない (40代・0歳児)
- ◆専業主婦なので、利用することが悪いことのように思う。 (30代・1歳児)
- ◆人とかかわるのが面倒 (40代母・子3人)
- ◆利用にあたり、周囲の理解が得られない。 (30代・1歳児)
- ◆支援サービスをあまり知らない。 (20代・1歳児)

これをみると、無料のサービスもあるけれど、制度をよく知らなかったり、専業主婦の母親は全部自分で子育てしなければならないという思い込みや、周囲の理解がそういった圧力にもなっている様子が分かります。

(2) 家庭訪問型の子育て支援を知っている人は13%

家庭への支援を、ニーズのある家庭に訪問して行う(アウトリーチ型といわれます)、「ホームスタート」(NPO)が登場し、下表でみるように、認知も13%と一定増えています。朝霞エリアでは17%と高い認知でした。

(図17) 家庭訪問型支援サービスを知っているか？



また、訪問型支援を利用したいかどうかを尋ねたところ、利用したい人は全体の3割以上になりました。「利用したくない」はわずか5%で、自分は必要ではなさそうではあるけれども自分以外のママたちの心情はみなさんよく理解して「利用したい人もいるだろう」と感じている人が2割以上いることがわかります。

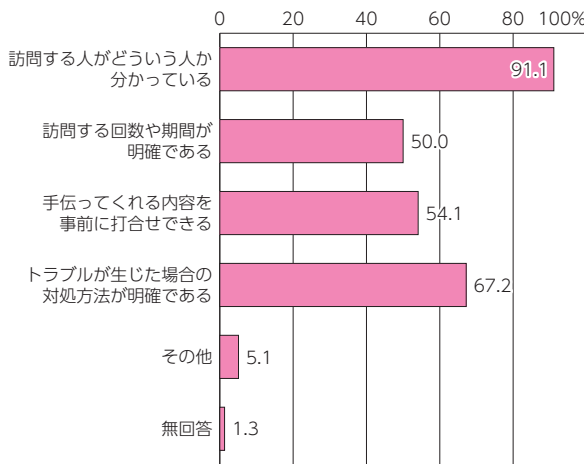
どちらともいえない人は、条件などを詳しく理解すれば、ニーズと合うかどうか判断できるでしょう。

(3) ニーズの背景にある気持ち・ためらい

それでは、家庭訪問型の支援で、自分が支援を受けるとしたらどのようなことが重要でしょうか。この設問は以前に調査して出てきた項目を主な選択肢として挙げています。

圧倒的多数の91%の人が挙げた項目は「訪問する人がどういう人か分かっている」という点です。自由記述に書かれていることをみると、「気が合わなかったらいや」「不衛生な人が来たら困る」など、具体的な経験も書かれています。次いで「トラブルが生じた場合の対応が明確」が67%です。この傾向は地域差がほとんどなく、全エリアで共通の数値になっています。

(図18) 訪問支援を受ける時の重要点



(4) 利用したい層はどのような背景か？

回答者全員をベースにすると、ホームスタートを利用してみたいという回答は35.6%でした（利用希望者という呼び方で進めます）。この数値と比較して、希望者の比率が高くなっている層をみてみます。

年齢別にみると20代では希望者が50%と大変高い数値になっていて、若年層でニーズが高いことが分かります。子どもの数でみると、1人めを育てている人で希望者が40%と、手助けがあったらいいなという気持ちは最初の育児でやや強いことが分かります。

就業別にみると、フルタイムの層で41%と高めです。フルタイムの人の中で育休中の145人をみると更に高く47%。仕事を直前までして、ママ友を作る時間も、育児の準備（学習など）をす

る時間もなかったのかもしれませんが。また、パートタイム全体では全数と変わらないですが、勤務5日以上の28人をみると44%が希望しています。やはり忙しい時間のやりくりがあるのでしょうか。居住年数でも差がみられ、現住所に住み始めて1年未満の層で41%と高めです。

では、育児中の気持ちとの関連もみてみましょう。とまどい・悩みが「よくある」層では49%とニーズが高いです。この悩みについては、「よくある」から「あまりない」まで、きれいに正の相関が出ています（図19）。

(図19) 訪問支援を利用したい率

(育児でとまどいや悩みを感じる頻度別)



同様に、情報不足を感じることも「よくある」層でも46%と希望が高いです。実際に話をきいてくれる人がどのような人か、によってもニーズの差があり、話を聞いてくれる人が「専門職」の場合、利用ニーズは42%と高めです。そして実際に一緒にしてくれる人のいない27人のうち15人（56%）が訪問支援のニーズをもつという高い連関になっています。「電話やネット相談」をした人41人のうち27人についても66%が利用ニーズがあり、少数ではありますが利用ニーズが集中していることがうかがえます。加えて、「自宅の近くにサービスがない」という人45人のうち21人47%と高めです。

家庭訪問支援を「知っていた人」より「知らなかった人」のほうが若干利用希望が高めにしているのも、この調査の効果と思われる。地域別では久喜エリアは低めで29%です。これらをまとめると、今支援を受けつつある人は訪問支援のニーズも高い、また、若年層、新規参入の人などが高いことが分かります。

7) 地域で頼れる存在に

日本は全体的に出生児数が減っていて、埼玉県でも減少している傾向です。近年は全国で100万人の赤ちゃんが毎年誕生し、そのうち6万人が埼玉県で生まれています。新米ママ・パパが県では年間6万人×2の12万人参入してくる社会状況です。世代間の考え方や感覚は日々更新されている状況ですので、当事者性もすぐに古くなるのが想像できます。私も2人目を高齢で出産したので、育児ツールが1人目の時とだいぶ変わってしまっていて驚いた経験があります。

子育て世代は日々新しく入れ替わっています。子どもが生まれ希望に満ちた若い親たちが、励まされ、新米ママ・パパから少しずつ子育てスキルも身につけていく、楽しい子育てを応援できる地域にしたいですね。つい20年ほど前まで、特に男性たちは「子育て」は女・子どもの領域と考え、自分の仕事が優位とっていましたので、現在でも地域によっては「子育ては全面的に母親の責任」という文化が残っています。同時に「家に他人をいれない」という感覚も強いですね。オープンマインド、大変だったらすぐに「助けて」と言っても良い文化に、若い世代は変わるかもしれません。ホームスタートや地域子育て支援が定着し「頼れる」存在になっていくことを願ってやみません。最後に自由記述からトピックスとして取り上げてみます。

(1) 学習したボランティアへの評価

私の両親もですが、子育て経験があると言っても、昔の子育ての方法が今とは違っているのに、昔のやり方を押し通そうという方もいます。ボランティアは大変ありがたいのですが、ボランティアの方に今の子育てについて学んでいただいてから、支援に携わって頂きたいです。

→記入後、養成講座受講者という説明を読みました。それなら安心です。夫がいても日中は母親と赤ちゃんだけで、帰宅後の夫は妻の話を聞いてはくれませんから、こういうとりくみはありがたいです。

(30代 7/5/0歳児)

この人はフルタイムの育休中の人で、養成講座を受講しているボランティアさんを評価しなしています。その他「支援者さんに今どきの情報をききたい」「もっと活動を広報してほしい」など今どきの子育て事情をよく知り、伝えて欲しいという要望が書き込まれていました。他にもボランティアへの要望が記述されています。

- ◆子育ての大変さを共有できる人。(20代・0歳児)
- ◆子育て経験がある人(20代・子0歳児)
- ◆傾聴の姿勢がしっかりあるボランティアさんが来てくれること。(30代・子3人)
- ◆「ママががんばれ」と言われそうで、気が引ける。まずは受け入れてほしい。(30代・子2人)

(2) 悲痛な叫びも散見

確かに子どもを作ったのは私本人ですので、責任と義務は自分にあると分かっていますが、小さな子ども三人の育児はとても大変で頼る人がいないので、朝から夜まで自分一人で育児をしています。自分の時間など全くなく、育児に悩み1人になりたいと思うことが多いです。

育児が苦手で私のような母親の元に生まれてきた子どもが不幸だと思えてなりません。人付き合いが苦手なので、児童館なども苦手で公園も苦手です。

子どもの為に…と思っても、どこに相談したらいいか分からないし、以前一度相談したところ、一時預かり、そして私のメンタルクリニックへの通院を勧められました。これが本当に解決策なのか？疑問で何もアクションを起こせませんでした。助けてほしいです。

この方は34歳で4歳を先頭に2歳・0歳児3人を育てる毎日に奮闘中です。専業主婦で夫と5人家族、6か月以内に引っ越してきたばかりです。子育て支援(おそらく一時保育)を利用しようとしたけれど、子どもが慣れず断念したようです。「助けて」という書き込みに返事を書きたいのですが匿名調査なので、術がありません。

しかしホームスタートなら支援できそうです。ホームスタートを利用したい、条件はどのような人が来るのか分かることと、トラブル対処法が決められていることが挙げられていました。

(3) 家に人が来るのは躊躇

家に来ていただくとなると気を使ってしまう。家の掃除やお茶出しやらこどもの寝るタイミングやら、話を聞いたり一緒に遊んだりなら、むしろこちらからボランティアのオタクへうかがう方が気が軽い。そうなる子育てサロンと同じになってしまう。無償でも、家に来ていただくのは気が重いです。子育てママはいつも忙しいですし、HSの利点は何でしょうか？でも、本当に子育てをたった一人でやっているお母さんや体の不自由な方等、HSを必要としている方は沢山いると思います。(32歳 子ども4歳)

日本の女性の場合「自分がガマンすれば」と心や家を閉ざす人が多いと言われています。大変だったらすぐ「助けて」と言える、「人権教育」も必要です。また、仕事している夫に遠慮して「手伝って」「助けて」と言えない書き込みもいくつかみられました。

(4) 地域での支援者の循環

出産後に家事や上の子の世話をしてくれる人がいると助かると思います。母親が亡くなって、頼る人もそれぞれ家庭があり大変そうで、これから第二子を考えているのですが、体も辛いしホルモンのバランスで気持ちも沈みがちになるのでそういう助けてくれる人がいると助けてもらいたいと思います。そういうのがあることを皆に伝わるように宣伝してもらいたいです。そして、私は保育士を15年以上やっています。そういうお仕事があれば、子育てに落ち着いたら私も誰かのためになるようにやってみたいと思いました。(30代・0歳児)

この人はフルタイムで働いている人なので、現役保育士さんかもしれません。地域の育児を助けてほしいという記述も、この人以外でも、かなりたくさんみられました。子育ての大変な期間がすこしでも軽減されるといいなという当事者性が、これからどんどん循環していくと、ホームスタートや様々な子育て支援により効果をもたらすと思います。

また、友人世代がみな子育て真っ最中あるいは働き盛り世代という状況で、図12や15のデータでも紹介したように、友人と話をする率は8割と高いのですが、友人と実際に一緒にできる率は6.8%と雲

泥の差があります。この記述にもその事情を垣間見ることができます。

(5) その他の特徴的な自由記述から

貴重な記述を多数いただきましたので、最後に紹介させていただきます。ホームスタートの仕組みを周知し、よりわかりやすく使いやすい活動になることを願います。

- 興味はあるが面識のない方の訪問に抵抗がある。(30代・4歳児・1歳児)
- 育児に疲れている時、掃除が行き届かず家の中を見られるのは恥ずかしい。(20代・子2人)
- 今の自分は必要ないが、こういったサービスが必要と感じることもある。(30代・3歳児・0歳児)
- 電話より対面で子どもを見たらうてアドバイスしてほしい。(30代・2歳児・妊娠中)
- 自分からサークル等に参加するのは苦手なので、自分の話を聞いてくれる人が来てくれるのは助かる。(30代・1歳児)
- 子育ては、初めての経験ばかりで悩み不安が多い、時にはイライラして自己嫌悪、自分を責めたり。話を聞いてくれる先輩がいたら助かる。(20代・1歳児)
- 衛生面等から他人を家に入れることに抵抗感がある。(30代・子2人)
- 幼保一元化で教育格差をなくしてほしい。(30代・子3人)
- もっと認知度を上げるべき。(30代・2歳児)
- 訪問型はすばらしい発想とは思いますが、家の掃除が行き届かないので、他人を受け入れる環境でない。(30代・子3人)
- こちらから、ボランティア宅に行く方がいい。(30代・子2人)
- 無償でも家に来てもらうのは気が重い。(40代)
- 相談では解決にならなかった。話を聞いてもらえるだけでもうれしい。(30代・1歳児)
- 困ったり悩んだりした時に利用したい。(30代・子2人)

「地域での子育てと支援に関するアンケート」調査票

地域での子育てと支援に関するアンケート

このアンケートは、子育て支援に関する調査を実施するために作成されました。調査結果に基づいて、地域での子育てと支援に関する課題を明らかにし、改善策を立案するための参考にさせていただきます。

このアンケートの結果は、子育て支援に関する調査結果として活用させていただきます。調査結果は、子育て支援に関する調査結果として活用させていただきます。

調査対象者：子育て支援に関する調査結果として活用させていただきます。

調査方法：アンケートを記入し、調査結果を分析し、改善策を立案するための参考にさせていただきます。

アンケートを記入 → 調査結果を分析 → 改善策を立案

このアンケートは、子育て支援に関する調査を実施するために作成されました。調査結果に基づいて、地域での子育てと支援に関する課題を明らかにし、改善策を立案するための参考にさせていただきます。

1

地域での子育てと支援に関するアンケート

このアンケートは、子育て支援に関する調査を実施するために作成されました。調査結果に基づいて、地域での子育てと支援に関する課題を明らかにし、改善策を立案するための参考にさせていただきます。

このアンケートの結果は、子育て支援に関する調査結果として活用させていただきます。調査結果は、子育て支援に関する調査結果として活用させていただきます。

調査対象者：子育て支援に関する調査結果として活用させていただきます。

調査方法：アンケートを記入し、調査結果を分析し、改善策を立案するための参考にさせていただきます。

アンケートを記入 → 調査結果を分析 → 改善策を立案

このアンケートは、子育て支援に関する調査を実施するために作成されました。調査結果に基づいて、地域での子育てと支援に関する課題を明らかにし、改善策を立案するための参考にさせていただきます。

2

地域での子育てと支援に関するアンケート

このアンケートは、子育て支援に関する調査を実施するために作成されました。調査結果に基づいて、地域での子育てと支援に関する課題を明らかにし、改善策を立案するための参考にさせていただきます。

このアンケートの結果は、子育て支援に関する調査結果として活用させていただきます。調査結果は、子育て支援に関する調査結果として活用させていただきます。

調査対象者：子育て支援に関する調査結果として活用させていただきます。

調査方法：アンケートを記入し、調査結果を分析し、改善策を立案するための参考にさせていただきます。

アンケートを記入 → 調査結果を分析 → 改善策を立案

このアンケートは、子育て支援に関する調査を実施するために作成されました。調査結果に基づいて、地域での子育てと支援に関する課題を明らかにし、改善策を立案するための参考にさせていただきます。

3

地域での子育てと支援に関するアンケート

このアンケートは、子育て支援に関する調査を実施するために作成されました。調査結果に基づいて、地域での子育てと支援に関する課題を明らかにし、改善策を立案するための参考にさせていただきます。

このアンケートの結果は、子育て支援に関する調査結果として活用させていただきます。調査結果は、子育て支援に関する調査結果として活用させていただきます。

調査対象者：子育て支援に関する調査結果として活用させていただきます。

調査方法：アンケートを記入し、調査結果を分析し、改善策を立案するための参考にさせていただきます。

アンケートを記入 → 調査結果を分析 → 改善策を立案

このアンケートは、子育て支援に関する調査を実施するために作成されました。調査結果に基づいて、地域での子育てと支援に関する課題を明らかにし、改善策を立案するための参考にさせていただきます。

4

VI 協力者のことば

協働事業としての ホームスタート

和光市保健福祉部こども福祉課
齊藤 洋

和光市では、第四次和光市総合振興計画において「ホームスタート（以下HS）への支援」を掲げて関わっており、平成25年度より協働型の委託事業として事業化する予定です。

HSは、行政の用意する子育て支援プログラムに自ら参加する力のある家庭と、行政による積極的な支援を必要とする虐待の疑いのある家庭との中間に位置し、虐待の方へ転んでしまう可能性のある家庭に手を差し伸べる支援です。

和光市が、協働事業とすることとした理由は、こうした中間家庭を支援するにあたり、利用者とビジターに対等な信頼関係を築くことに焦点を当てたためです。HSでは無償ボランティアが訪問するため、対等性を築きやすい関係にはありますが、加えて地域の実情や課題について身近な市民が支援することで、より信頼関係を築きやすいと考えました。

HSはボランティアな活動ですが、ビジターの養成、オーガナイザーの報酬など質の高い事業を継続するには経費が掛かります。行政では事業費の確保と他の行政機関との連携を担うことで、協働としての役割分担をしていく予定です。

虐待の対応は、行政のみで行うのは難しくなっており、地域住民と協働することでより良い効果が生まれます。地域による支えあいの子育てを実現し、家庭の孤立を防ぐことができるHSが、今後虐待防止のスタンダードへと普及していくことを願っています。

ホームビジターの 養成にかかわって

ホームスタート・わこう トラストィ
臨床心理士 竹部友子

私は、普段カウンセリングの仕事をしていることもあり、ホームスタートわこうのビジター養成講座では、「傾聴の意義と方法」を担当させていただいています。また、すでにビジターとして活動されている方々に対しても、ロールプレイを中心にした内容でフォローアップ研修を行っています。

私が事前に考えた、訪問先で出会うかもしれない、いくつかのテーマで行き詰まりを抱えて、自信を失い孤立しているお母さん像のシナリオに基づいて、ビジターと利用者の役割を交代しながらやりとりしていただく体験学習です。

迫真にせまる利用者役の方の話を受けたビジター役の方は「何て応えればいいのか分からなくなった」「気持ちを楽にしてあげるには、どんな言葉かけが良いのだろう」「自分自身も同じように悩んだ時期があったが、その体験を伝えた方が良いのか」など、傾聴の姿勢について、悩みながら真剣に取り組んで下さいます。その姿には頭が下がる思いです。

講座や研修を担当させていただく中で、ホームスタートの傾聴とは、単なる聴き方・応え方のテクニックを指すのではなく、そっとそばに寄り添ってくれる人がいる、ということ、つまり、ビジターの存在こそが傾聴なのだろう、と思うに至りました。今後も、ホームスタートの最前線にいるビジターのみならず、スキーム全体で学びを続けていきたいと思っています。

ホームスタートは、たくさんの関係者のみなさんに支えられて活動しています。その支えこそが、ホームスタートが地域に根差していくうえでの、大切なつながりなのです。温かな励ましをいただき、本当にありがとうございました。

ホームスタート・かぞの 運営委員として

加須市福祉部子育て支援課
河野幸男

私は埼玉ホームスタート推進協議会の設立とともに、加須市の社会福祉法人 愛の泉さんが「ホームスタートかぞ」として活動するためのモデル事業において、加須市が協議体として参加すると同時に運営委員として携わってまいりました。

加須市は、加須市次世代育成支援地域行動計画後期計画に基づき、様々なメニューの子育て支援事業に取り組み、一定の効果を挙げておりますが、事業の多くは自分から進んで外（社会）との関係を結ぶ必要があり、そのようなことが苦手な方には外（社会）とのきっかけづくりが困難なものとなっております。

このような中でのホームスタート事業は、市の様々な子育て支援事業を利用する際のパイプ役、あるいは事業と事業の間を埋めるものとして非常に効果的で有効なものと考えております。特に年々増加している児童虐待の要因の一つとされている「子育て中の親の孤立化」の問題には有効な手段の一つであり、事業を進めるには必要な知識やスキルを学んだ「ビジター」の存在が重要、かつ、不可欠なものです。

このように、親支援事業として非常に有効なホームスタート事業ですが、ビジター養成や研修費、オーガナイザーの報酬等、ある程度の経費が掛かり、財政状況が厳しい中での事業運営には更なる工夫が必要と考えております。

ホームスタートの信頼感はどこに存在しているのか

ホームスタート・かぞ トラストィ
東京未来大学 野田敦史

効率性や営利が優先される現代社会において、ホームスタートが子育て支援の実践者や行政関係の人達の中で注目されている理由のひとつとして、利用者に対してビジターが「素人性（対等な協働関係）」と、「傾聴という受容性」という人と人との関わる部分において表面的には、最も謙虚でシンプルな方法で実践している点にあります。この方法は、深層的には実を言うと私たちが忘れていた根源的な重要な概念とそれを支える仕掛けによって構成されていることに気づかされます。

知ってのとおり学術の世界では、“繋がり”を示す言葉のひとつとして「愛着（アタッチメント）」があります。愛着関係というと母子関係に限定されるようなイメージがありますが近年の研究では大人同士の関係においても、この概念を用いた研究がおこなわれています。これらの研究では、この愛着の本質的要素を「守ってもらえることに対する信頼感」と意味づけしています。また、「人は、愛着を基盤に社会性を発達させ、自己や他者について理解を深め、他者との対人交渉を含めた外界への探索活動を行う」とも言われています。つまり、愛着すなわち「守って（支えて）もらえること」が様々な発達を支える基盤となっていることが解ります。

これらの見解をホームスタートの取り組みと照らし合わせると、利用者とビジターの関係において、さらにビジターとオーガナイザー、トラストィとの関係においても、愛着関係のエッセンスが取り入れられていることに気づきます。利用者、ビジターそしてオーガナイザー自身の信頼感とは、ひとりで何かしようとした（できた）時に、“相手に守られて（支えられて）いる”気持ちを実感した時にはじめて生まれてくるものなのです。

地域での ホームスタートの必要性

ホームスタート・こしがや トラストイ
越谷市男女共同参画支援センターほっと越谷
中村敏子

全国においても子育て支援の施策は様々な形で行われて充実してきています。地域の子育て支援拠点施設、児童館、保育園などに併設される子育て相談、そして民間団体等が助成金、委託金などを受け運営している子育てサロン、ひろばなどがあります。それでもなお子育てに悩み、生き方に戸惑っている親は多く、そして子どもの虐待件数も年々増加しているのが現状です。既成の場にどんな形ででも出てこられる親は、まずは第一歩は踏み出されていると思います。でもその背後にこの一歩を踏み出すことは簡単なようで実際はとても難しく、様々な事情で踏み出せずに悶々としている親が大勢いると思われる。こうした人への支援策として希望する家庭に出前での子育て支援（ホームスタート）は重要な役割を担っていると思えます。

子育ては日常の暮らしの中で行われています。よそい着ではなく、普段着の中での積み重ねです。同じような立場の仲間と一緒に家事や育児を行い、その何気ない所作の中に子育ての悩みからときはなされるヒントが見つかります。

専門家でも友人でも親でもない人が同じ目線で一緒に行動することで信頼関係が生まれます。程よい距離感の地域の中でこういう活動が行われることは、いざという時に地域の中で頼れる人がいると思える安心感にもつながります。

ホームスタートの活動が広がって行くことで子育て支援の新たな方向性が見えてくるように思えます。地域の人がかかわる子育て出前支援（ホームスタート）は、これからの子育て施策の大きな柱の一つになっていくのでしょうか。

アンケート調査を協働して

生活協同組合さいたまコープ
参加とネットワーク推進室
根岸公江

今回コープの個人宅配で「赤ちゃん割引」をご利用の組合員さんから、アンケートの返信を990人からいただきました。妊娠中や育児休業中の方もいらっしゃるし、多くの方が「自由記入欄」にメッセージを記入されており、感激しました。中には開封した担当者が「この方は支援が必要なのでは？すぐにも飛んでいきたい」と思われる方もいらっしゃったとのこと。今までもさいたまコープでは、親子ひろばや様々な企画での保育などの子育てのお手伝いと「赤ちゃん割引」やパパママ応援ショップ優待サービスなどでお買い物のお手伝いにとりくんできました。しかし、しくみや制度でつながるだけでなく、ホームスタートのような身近な“人”と協働するつながりが求められていると感じました。また、情報提供を望む声もありました。“つながっている”ということをもっと大切にしたいと思いました。

「コープの個人宅配を利用する理由」では、「アレルギー除去食品」や冷凍のお肉「パラパラミンチ」など便利で、かつ安心して離乳食にも使用できると、商品名も多くあげていただきました。声をいただけるといことは、とてもありがたいことです。

さいたまコープは2013年3月21日より、ちばコープ、コープとうきょうと組織合同し“コープみらい”になります。これまでにいただいたお声からこれからのコープの「ありたい姿」が描かれ、子ども・子育て支援は引き続き重要なテーマです。今回のお声も具体的な計画作りに活かして、“一人で子育てからみんなで子育て”を実現していきたいと思えます。もちろん県内の行政やNPOなどと協働・協働してこそこのことと思いを新たにしております。

ホームスタートへの期待

日本社会事業大学専門職大学院
宮島 清

私は今、厚生労働省が設置した「児童虐待等要保護事例の検証に関わる専門委員会」のメンバーとして、発生した虐待死事例とこれへの対応について検証する作業に参加させて頂いています。私は、この作業を通じて、改めて次のことを教えられています。

第1に、児童虐待は、非常に多様な状況のもとで発生するということです。確かに、どのような事情にあるにせよ、児童虐待を許容することはできません。しかし、悪意に満ちた加害だけでなく、行き詰まり疲労の極限にあった人が発作的に行ってしまうことによっても、たくさんの悲惨な事件が生じていることを、私たちは忘れてはなりません。

第2に、この問題の解決には、専門職による関わりと市民の関わりの両方の充実が必要だということです。これは、決して重篤な例に専門職がかかわり、予防的な関わりは市民が担うということだけではありません。確かに、悪意に満ちた虐待で、加害者に暴力性や攻撃性がある場合は、市民が直接関わることは適切ではありません。しかし、孤立し子どもの養育に悩み疲れている保護者には、専門職と市民が力を合わせて行う支援こそが効果的なのです。

ホームスタートは、市民による市民のための活動です。しかし、ホームスタートは、市民と専門職が力を合わせるための仕組みでもあるのです。私は、ホームスタートの活動が広がり、子どもたちと保護者が虐待の苦しみから救いだされることを心から期待しています。

きめ細かな 支援の担い手として

埼玉県福祉部少子化対策局少子政策課
加藤絵里子

埼玉県の夫は、睡眠時間が短く勤務時間が長い厳しい状況の中で、育児・家事にも時間をかけている——。総務省の「平成23年社会生活基本調査」から、こんな結果が明らかになりました。

調査によると、埼玉県の夫の通勤・通学時間は、全国2位の76分。家事の時間は全国10位の15分、育児時間は全国3位の63分、睡眠時間は、全国2番目に短い7時間となっています。

一方、国勢調査による埼玉県の核家族世帯の割合は62.2%で、奈良県に次いで全国2位、住民基本台帳による転入超過数も東京都に次ぐ全国2位です（ともに平成22年）。

これらから、子育てに厳しい環境のもと、夫婦のみで子育てを行わざるを得ない埼玉県の子育て家庭の姿が浮かびあがってきます。

孤立しがちな子育て家庭には、高いストレスを抱えた母親がいるのでは？地域の子育て支援資源を利用できていないのでは？——ホームスタートの着眼点です。

ホームスタートは、「気になるけれど、問題が顕在化していない家庭」に早期に対応し、リスクの重篤化を防止するものです。また、地域をよく知った地域の支援者が、閉じこもりがちな家庭を地域と結び付けることにより、子育てを地域が支える土壌をつくり出します。

行政の手が届かないきめ細かな支援の担い手として、行政と連携・協働するパートナーとして、ホームスタートのような地域の子育て支援の取組が広がっていくことを期待します。

埼玉ホームスタート推進協議会

特定非営利活動法人子育てサポーター・チャオ
特定非営利活動法人わこう子育てネットワーク
特定非営利活動法人ホームスタート・ジャパン
特定非営利活動法人子ども家族いきいきプロジェクトあっとほーむ
社会福祉法人愛の泉
社会福祉法人吉川市社会福祉協議会
一般社団法人日本多胎支援協会
日本社会事業大学
生活協同組合さいたまコープ
加須市
和光市
埼玉県

事業協力

市村彰英 (埼玉県立大学)
近本聡子 (公益財団法人生協総合研究所)

平成24年度埼玉県共助社会づくり支援事業 (市町村・NPO等協働モデル推進事業)

孤立した子育て家庭のニーズを支える
ホームスタート地域ネットワーク事業

平成25年2月14日発行

発行責任者

埼玉ホームスタート推進協議会
会長 森田圭子

連絡先

〒330-0072 埼玉県さいたま市浦和区領家3-23-9 田中方
TEL&FAX 048-886-4584
e-mail saitama.hs.kyougikai@gmail.com
<http://saitamahs.blog.fc2.com/>